

別院とともに 歩んだ人生

―後輩法務員が古川良心に聞く―

「このたび別院を退職される、古川良心さんにお話を伺いました。またも、古川良心さんはこのようにきつかけで、桑名別院の列座になられたのでしょうか？」

当時、桑名別院ではそれまでにはいなかった住み込んで働くことのできる若い列座（法務員）を探していて、古川さんに白羽の矢が当たったのだそうです。

それは同朋大学内にある仏教文化研究所で学生の古川さんが『国訳一切経』の整理の手伝いをしていた当時、大学の専任講師をされていた尾畑文正先生が、別院からその話を聞き、古川さんを紹介されたのです。



古川さんは以前、お父様が三重

教務所に勤めていたことがあり、そういう縁も感じたそうです。こうして1980年（昭和55年）に古川さんは住み込みの列座として別院につとめることになりました。以来、公私の区別なくお朝事からお夕事までのお勤めやお給仕に明け暮れる毎日を過ごされます。

入って間もない頃はまだまだ儀式作法や声明など、わからないことばかりだったので、亡くなった五瀬泰雄さん、伊東良温さん、岡本克之さんから、ときには厳しく叱られるながらも、丁寧に教えていただくことで少しずつ身につけ、夜には先輩方と杯を酌み交わしながら、いろいろな話を聞かせてもらうのが大好きだったそうです。

その頃、食事や身の回りのことは、賄いをしてくださっていた堤さんという方にお世話になり、三食、心のこもった料理を用意していただいたことが何よりありがたかったそうです。なんとこの頃古川さんは1年のうち340日は別院に泊まっていました。

桑名別院にて 40年間 おつかれさまでした。

3月いっぱいをもちまして、桑名別院法務員の古川良心が定年により退職いたしました。1980年3月1日より列座として法務を担い、以後約40年間におよんだ古川法務員の足跡をたどり、有縁の方々と共に振り返らせていただきます。



最後の別院お夕事を勤める古川氏

それからは法務員をされる傍ら、他の列座を指導する立場になり、今では「別院の生き字引」「わからないことがあれば、古川さんに訊け」とみんなから頼られる存在になられたことは言うまでもありません。

でも古川さんはこう言います。

「自分は仕事として別院にいたわけじゃない。勉強をさせていただくつもりでやってきたんや。そうでなければやってこられへんかった。どうか後輩のみんなにもそのような姿勢で儀式作法や声明を研鑽してほしいんや」

そんな生活を20年ほど続けるうち、ご両親の体調不良など、環境に変化があり、南濃町のご自坊（浄國寺）の法務も忙しくなったので、2000年（平成12年）ちよつど別院の蓮如上人御遠忌が勤められる頃、古川さん一人が住み込むことが難しくなったので、複数の法務員による当番制となり、それが現在に至っています。

42年間この熱い思いで別院とともに人生を歩んできた古川さん。これからの立場は変わりますが、別院を支え続けてくださることでしょう。

本当にお疲れ様でした。

（藤井）